慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	白鳥伝説とグラール伝説 : 中世ヨーロッパにおける二つの異界
Sub Title	Die Schwanensage und die Gralssage : Zwei Anderswelten im europäischen Mittelalter
Author	會田, 素子(Aida, Motoko)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2011
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. ドイツ語学・ 文学 (Hiyoshi-Studien zur Germanistik). No.47 (2011.) ,p.73- 97
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	小林邦夫教授 退職記念号 = Sonderheft für Prof. Kunio KOBAYASHI
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032372-20110331-0073

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

白鳥伝説とグラール伝説
――中世ヨーロッパにおける二つの異界――

會　田　素　子

1.　Richard Wagner のロマン的歌劇 *Lohengrin* における異界性

1850 年 8 月 28 日，ヴァイマル宮廷劇場において Richard Wagner（1813–1883 年）によるロマン的歌劇『ローエングリーン』（Die romantische Oper „*Lohengrin*“）が初演された。当時 Wagner には 1849 年にドレスデン革命に関与した廉で逮捕状が出ており，チューリヒに逃れていた。そのため後に彼の舅となる Franz Liszt（1811–1886 年）が指揮を務めたが，上演は成功を収め，現在に至るまで「白鳥の騎士」と言えば Wagner による *Lohengrin* が念頭に置かれることが多い。なお，「白鳥の騎士」という文学的主題は，「危機に瀕した高貴な女性のもとへ白鳥の曳く小舟に乗った騎士が現れ，自らの出自を尋ねない事を条件として彼女を助け結婚するが，後に夫の素性を不審に思った妻は禁じられた問いかけを発してしまい，騎士は再び白鳥の曳く小舟に乗って去っていく」というプロットを持つものである。

しかし，この白鳥の騎士をテーマとした Wagner のロマン的歌劇は，19 世紀ドイツで脚光を浴びた中世ドイツ文学研究の産物に他ならなかった。彼は中世ドイツ文学を原典とした歌劇や楽劇を創作したが，元来多読家であったこともあり当時刊行されたばかりの宮廷騎士文学や伝説に関する文献から主に音楽作品のための着想を得ていた。*Lohengrin* について言えば，

1839 年から 42 年のパリ滞在の折に *Tannhäuser* 創作のために通読した『ヴァルトブルクの歌合戦について』[1]（ケーニヒスベルク王立ドイツ協会会報に掲載）と題する C. T. L. Lucas による論文に散見された「白鳥の騎士 Lohengrin」に関する記述が，彼にインスピレーションを与えたという。それについて Wagner は彼の自伝『わが生涯』の中で以下のように語っている。

> In demselben Hefte fand ich nun aber auch, und zwar als Fortsetzung des Wartburggedichtes, ein kritisches Referat über das Gedicht vom »*Lohengrin*«, und zwar mit ausführlicher Mitteilung des Hauptinhalts dieses breitschweifigen Epos.
> Eine ganz neue Welt war mir hiermit aufgegangen, [...].
> （まさにその冊子の中に，私は――それもヴァルトブルク（の歌合戦）の詩の続編として―― *Lohengrin* という詩についての校訂的な研究報告をも，しかもこのさらに冗長に続く叙事詩の主な内容に関する詳細な報告とともに見出しました。
> 一つのまったく新しい世界がこのようにして私のもとに開いたのです［…］。）[2]

こうして一冊の冊子が Wagner に *Lohengrin* 創作の契機を与えたのであ

1）C. T. L. Lucas: Abhandlungen der Kgl. Deutschen Gesellschaft zu Königsberg 1838.

2）Richard Wagner: Mein Leben: Erster Teil: 1813–1842. in: Richard Wagner: Werke, Schriften und Briefe (CD-Rom), S. 31272 (Vgl. Wagner-Leben, S. 224). なお，日本語訳は拙訳。作者不詳の論争詩 *Wartburgkrieg* の「なぞなぞ（Das Rätselspiel）」と呼ばれる部分の Str.3–36 と，Nouhuwius (?) の叙事詩 *Lohengrin* の Str.1–32 までがほぼ重複しており，両作品の間に何らかの関係が存在したことがうかがえる。Vgl.『ワルトブルクの歌合戦』岸谷・柳井訳著，大学書林，1987 年，S. 23–27.

るが，彼はさらに中世文学研究を進め，同作品の創作のために主に以下のような作品も原典あるいは参考文献として使用したとされている[3)]。

a. Wolfram von Eschenbach 作
Parzivâl（『パルチヴァール』：1200–1210 年頃）（Karl Simrock，San Marte 編）
b. Wolfram von Eschenbach 作
Titurel（『ティトゥレル』：1217–20 年頃？）（Karl Simrock，San Marte 編）[4)]
c. Nouhuwius（?）作
Lohengrin（『ローエングリーン』：1285 年頃）（Johann Joseph von Görres 編）[5)]
d. Jacob Grimm 編
Weisthümer（『慣習法令集』全 7 巻：1840–1872 年）
e. Jacob Grimm，Wilhelm Grimm 編
Deutsche Sagen（『ドイツ伝説集』：1816/1818 年）
f. Johann Wilhelm Wolf
Niederländische Sagen（『オランダ伝説集』：1843 年）

これらの白鳥の騎士を主題とした作品やグリム兄弟の伝説集などは中世期にドイツで書かれた叙事詩，あるいは伝承されていた伝説であるが，Wagner のロマン的歌劇 *Lohengrin* は 19 世紀にそれらが「再発見」され

3）Vgl. Martin Gregor-Dellin: Richard Wagner. Sein Leben - sein Werk - sein Jahrhundert: Erster Teil: 1821–1849. in: Richard Wagner: Werke, Schriften und Briefe (CD-Rom), S. 50215 (Vgl. Gregor-Dellin WagnerBio, S. 226).
4）Wolfram von Eschenbach: Parzival und Titurel, hg. v. Karl Simrock, Stuttgart und Tübingen 1842.
5）Lohengrin, ein Altdeutsches Gedicht, hg. v. Johann Joseph v. Görres, Heidelberg 1813.

たことにより誕生した新しい受容の一例であるとも言うことができる。しかし，彼はその中世の物語に，キリスト教の力が確固たるものとなる以前のゲルマン神話的な独自の世界を挿入した。例えば *Lohengrin* に登場する Ortrud（オルトルート）という女性がその例であり，キリスト教が伝播する以前のゲルマン人世界の権化とも呼ぶことが可能な非キリスト教的な人物として描写されている。彼女について，Wagner は 1852 年 1 月 30 日にチューリヒからヴァイマルの Liszt に宛てた書簡の中で次のように記している。

> Es ist eine Liebe in diesem Weibe, die Liebe zu der Vergangenheit, zu untergegangenen Geschlechtern, die entsetzlich wahnsinnige Liebe des Ahnenstolzes, die sich nur als Haß gegen alles Lebende, wirklich Existirende[6] äußern kann. [...] sie möchte die Welt und die Natur ausrotten, nur um ihren vermoderten Göttern wieder Leben zu schaffen.[7]
> （この女性の中にある愛というものは，過去への，没落した一族への愛であり，家門への誇りという恐ろしいほどに狂おしいまでの愛であり，それはあらゆる生きる者，現実に存在する者たちに対する憎しみとしてのみ現れ得るものなのである。［...］彼女は，ただ朽ち果てた彼女の神々に再び生命を生ぜしめんがために，世界と自然を根絶したがっている。）

この記述から窺えるのは，生きる者への愛を持つことが不可能であり，自らの過去の祖先への愛のみを糧として生きる女性，つまりキリスト教の

6）原文のまま。

7）Sämtliche Briefe: Bd. 4: Briefe Mai 1851 bis September 1852. in: Richard Wagner: Werke, Schriften und Briefe (CD-Rom), S. 10180–10181 (Vgl. Wagner-SB Bd. 4, S. 273–274). なお日本語訳は拙訳。

神が創り出した「世界と自然」の破壊を望み，ゲルマンの神々のみを信仰する非キリスト教的あるいは異界的な女性としての Ortrud 像を Wagner が意図していたであろうということである。

しかし，*Lohengrin* において彼女だけがゲルマン的，あるいは非キリスト教的な異界性を備えた存在なのであろうか。実際に Wagner の *Lohengrin* の中には，他にも異界的なモチーフが含まれているのである。そして中世のローエングリーン伝説，あるいは白鳥の騎士伝説と言えば，現在では一般に「Gral：グラール（聖杯）」との密接な関係を持つキリスト教の影響が強いものと考えられるが，中世に流布していた白鳥の騎士伝説の原型こそはキリスト教化される以前のヨーロッパを語るものであった。本論ではこのような点に着目しつつ，白鳥の騎士伝説の内包する様々な異界性や超自然性に注目する。

2.　フランス発の白鳥の騎士伝説

中世ドイツで成立した白鳥の騎士を主題とした物語の中でも最も有名であるのは Wolfram von Eschenbach による叙事詩 *Parzivâl*（『パルチヴァール』：1200–1210 年頃）である。実際に Wagner も *Lohengrin* 創作の際の原典として *Parzivâl* を利用しているが，Wolfram も 1165–1190 年頃にトロワのシャンパーニュ伯やフランドル伯の宮廷で活躍した Chrétien de Troyes によるグラール（聖杯）探求の物語 *Perceval et Le Conte du Graal*（『ペルスヴァル』：1190 年以前）[8] を原典として *Parzivâl* を創作した。そして Wolfram は彼の叙事詩の結末に「白鳥の騎士 Loherangrin の物語」を挿入している[9]。すなわち，現在我々が念頭に置く「グラール城出身の救世主，Lohengrin」という概念は，Wolfram によるこの結びつけが発端

8）フランス中世文学集 2　―愛と剣と―，『ペルスヴァル』天沢退二郎訳，白水社　1991，S. 141–323.

9）Chrétien の *Perceval* はおそらくは作者の死によってその完成が阻まれた。そのため Chrétien が意図していた結末は依然として謎である。

である。そもそも彼の *Parzivâl* 以前に主にフランスで流布していた白鳥の騎士伝説は，グラール伝説とは関わりのないものであり「Ur -（原）白鳥の騎士伝説」とも呼ぶことができる。ここではまず，中世ドイツ文学に移入される前段階のフランスの白鳥の騎士伝説へと論点を移すこととする。

Wolfram が *Parzivâl* において白鳥の騎士について言及するおよそ 100 年前，フランスでは十字軍武勲詩という文学形式が存在していた。それは十字軍で武勲を収めた騎士たち，とりわけ Godefroy de Bouillon（1060 年頃 –1100 年）の生涯について語るものであり，その中で彼の祖父が白鳥の騎士であるという記述がなされている[10)]。十字軍武勲詩のシリーズの中でその白鳥の騎士の活躍を物語るのが *Chevalier au Cygne*（『白鳥の騎士』）であり，その前談の *La Naissance du Chevalier au Cygne*（『白鳥の騎士の誕生』）が騎士の誕生から幼年時代を物語っているが，実際には『白鳥の騎士』の方が『白鳥の騎士の誕生』よりも先に書かれた可能性が高い[11)]。白鳥の騎士の誕生を語る物語は実は 4 種ほど存在しており，白鳥の騎士の母の名にちなんで代表的な 2 パターンを *Beatrix*（『ベアトリクス』）と *Elioxe*（『エリオクス』）と名付けている。両者の相違点を交えながらまとめると以下の様になる。なお，E は *Elioxe*，B は *Beatrix* バージョンを指す。

1. E：Lotair 王は道に迷い泉のほとりで寝ていると「山からやって

10）Godefroy の祖父が白鳥の騎士であるという証言は十字軍武勲詩と同時代か，あるいはそれに先んじて二種残されている。Guillaume de Tyr（1130 頃 –1186 年）による *Historia Rerum in Partibus Transmarinis Gestarum*（1173 年以前）と Gui de Bazoches（1146–1203 年頃）による書簡（1175–1180 年頃）の中である。Vgl. The Old French Crusade Cycle, vol. 1, La Naissance du Chevalier au Cygne, The University of Alabama 1977, S. lxvii –lxviii.

11）The Old French Crusade Cycle, vol. 2, Le Chevalier au Cygne and La Fin d’ Elias, The University of Alabama 1985, S. xxvi–xxvii.

きた」Elioxe に介抱される。王は美しい彼女と結婚し，彼女は 6 人の息子と 1 人の娘を生み，彼らの子孫の中からオリエントで王になるものが出ることを「予言する」。

B：Oriant 王と Beatrix 王妃は長く子どもに恵まれなかった。ある日双子を見た王妃は嫉妬から「双子は不義の証拠」と言う。まさにその夜，王妃は 7 人の子どもをみごもる。

2. E：王は Elioxe を城へ連れ帰り，母の反対にもかかわらず正式に結婚する。その後，王が異教徒との戦いに出かけた留守中に Elioxe は首に金の鎖をつけた 7 人の子を予言どおりに産み，亡くなる。

   B：Beatrix は男子 6 人と 1 人の女の子を産み，彼らの首には銀の鎖が巻かれていた。

3. E：王母は召使いに命じて子どもたちを森に捨てさせ，それを見つけた隠者は子どもたちを育てる。王母は帰った王に誕生したのは 7 匹のドラゴンであり，Elioxe を食べた後に消え去ったと嘘をつく。

   B：邪悪な王母 Matabrune は召使いに乳児を殺害するように命じるが，彼は森に捨ててくる。隠者が子どもたちを見つけ，養育する。一方王母は，王に Beatrix が 7 匹の犬を産んだと嘘をつき，それが原因で彼女は牢に入れられる。

4. E：7 年後，王の使者が隠者の庵で首に金の鎖を巻きつけた 7 人の子どもに出会い，王母にこのことを報告する。彼女は Elioxe の子どもであることに気づき，使者に命じて鎖を奪って来させる。女子のみが危機を免れる。

   B：数年後，王母の召使いが隠者の庵で子どもたちを見かけ，そのことを彼女に報告する。召使いが子どもたちのもとに鎖を奪いに来るが，隠者のお気に入りで共に出かけていた男の子のみが危機を免れる。

5. E：6 人の男子たちは白鳥に変身してしまう。白鳥たちは父の城の池に飛来し，王は皆に保護を命じる。しかし，彼の甥が白鳥を仕留めようとしたことに王は怒り，彼に金の鉢を投げつける。その修理に件の金の鎖が 1 本使われてしまう。

   B：6 人の子どもたちは白鳥に変身してしまう。白鳥たちは父の城の池に飛来する。一方王母は，奪った鎖で杯を作るように金細工師に命じる。彼は 1 本で 2 つの杯を作り，5 本の鎖は手元に残しておく。

6. E：一方隠者から送りだされた変身を免れた少女は，修道院に着く。それは王が Elioxe のために建てたものであり，そこでパンを貰った少女は池でたまたま白鳥たちを見つけ，兄弟であると気づく。

   B：15 年後，王妃 Beatrix は彼女を守る代理の戦士が現れなければ火刑となることを宣告される。一方，隠者のもとに天使が現れ，事情を知った白鳥への変身を免れた息子が母を救出するために出発する。彼は街で洗礼を受け，Elias と名付けられ，Elias は王母の代理戦士を倒して Beatrix を解放する。

7. E：白鳥と少女のことを耳にした王は，彼女の話から母の裏切りを知り，残る金の鎖 5 本を白鳥に掛けてやり人間の姿を取り戻させる。王の息子たちは騎士となるが，鎖を溶かされてしまった一羽が白鳥のままとなる。息子たちのうちの 1 人はその白鳥のままの兄弟の曳く小舟に乗って冒険に出発する[12)]。

   B：鎖を戻された 4 人の男子と 1 人の女の子は人間に戻り，洗礼を受け名前を得る。ただし鎖を溶かされた男子が白鳥のままであった。王となった Elias は逃亡した Matabrune を包囲し，彼女は

12）以上，次の文献より要約。The Old French Crusade Cycle, vol. 1, La Naissance du Chevalier au Cygne, The University of Alabama 1977, S. lxxxxiii–lxxxxiv.

Beatrix が火刑に処せられるはずであった薪の上で処刑される。Elias は天使の命に従い，兄弟である白鳥の曳く小舟に乗って冒険に出る[13)]。

Elioxe と *Beatrix* を比較すると，*Elioxe* バージョンの方がよりメルヒェン的，あるいは伝説的であることが理解できる。両者の間に何らかの典拠関係があるのか，あるいは共通の原典を持つのかは明らかになっていないが，モチーフの相違は明らかである。白鳥の騎士の母親に関しても *Beatrix* では「王妃」という実社会により近い描写がなされているのに対して，*Elioxe* における母親は不思議な出自と予言の力を持つといった超自然的ともいうことができる要素を備えている。いわば *Beatrix* バージョンは Godefroy de Bouillon の祖先の出自を語るにふさわしい，騎士社会に適合した物語に変化しているが，その代表的な箇所は変身を免れる子どもが男子になり，決闘裁判によって母を解放するといった中世騎士文学的な描写であろう。

Beatrix におけるこのような描写は，武勲詩が子どもたちの白鳥への変身物語を語る部分から，白鳥の曳く小舟で出発する騎士 Elias のその後の冒険談へと推移していく過程をスムーズにする潤滑油のように作用していると考えられる。おそらくはこのような理由も一つの原因となり，中世当時の人々も *Elioxe* よりも *Beatrix* バージョンを好んだであろうということも考えられるが，それは写本伝承の状況に鑑みても明らかであり，*Elioxe* バージョンは完全な形の写本が 1 種，断片 2 種が残るのに対して，*Beatrix* バージョンでは完全なものが 4 種，断片が 4 種残されている。

武勲詩は「白鳥の騎士の誕生」部分の後，兄弟の白鳥とともに出発した息子 Elias（エリア，Elyas とも）の冒険を物語るが，この部分がいわゆ

13）以上，次の文献より要約。The Old French Crusade Cycle, vol. 1, La Naissance du Chevalier au Cygne, The University of Alabama 1977, S. lxxxxvi–lxxxxvii.

る *Le Chevalier au Cygne* である。以下にプロットの要点を整理する。

a. Elias は白鳥の曳く小舟に乗ってライン川を遡りナイメーヘンまでやってくる。当地ではザクセン伯がブイヨン公夫人の領地を占領していた。
b. 漁師からブイヨン公夫人の危機を聞いた Elias は Otto 帝に奉仕を申し出る。そしてさらにブイヨン公夫人の代理の戦士としてザクセン伯と戦うことにする。ブイヨン公夫人とその娘が神に祈る中，決闘裁判において Elias が勝利する。
c. Elias はブイヨン公夫人の娘 Beatrix と結婚する。その際に彼の氏素性を尋ねない事を約束させる。その夜 Beatrix は天使によって Godefroy de Bouillon ら 3 人の息子の母となる娘を身ごもったことを知らされる。
d. Beatrix が敵の手に捕えられるといった紆余曲折の後，再び無事にブイヨンへ戻った Elias と Beatrix に娘が誕生し，Ydain と名付けられる。
e. しかし，娘の 7 回目の誕生日の夜，Beatrix は禁じられた問いかけをしてしまう。Elias は象牙の角笛を残し，白鳥の曳く小舟で去っていく。
f. その後，Ydain が結婚し Godefroy ら 3 人の息子の誕生が続くが，白鳥の騎士 Elias の後日談も記されたバージョンも存在しており，その中では故郷に帰った Elias と妻子の再会が語られている。

上記の *Le Chevalier au Cygne* では超自然的なモチーフは姿を潜め，キリスト教の色彩を帯びていることは明らかである。これは武勲詩の中で白鳥の騎士が第一回十字軍の英雄 Godefroy de Bouillon の祖父として系譜上で Godefroy と繋げられることと関連していると考えられる。

しかし，史実に鑑みると Godefroy の母方の祖父は上および下ロートリ

ンゲン公の Godefroid II, dit de Bardu（1069 年没）でありその父は Gozelo I（1044 年没）であるため，武勲詩の中で語られていた超自然的な要素を含んだ出自は架空のものであることは明白である[14]。それではなぜ白鳥の騎士は Godefroy の祖先となったのであろうか。それには cygne（白鳥）と十字軍の騎士たちが身に着けていた signe（signe de la croix「十字のしるし」の意）が音声学上の混乱を引き起こし，この混同の結果「白鳥の騎士」が Godefroy の祖父とされたと推測されている[15]。

このように理由は明らかではないにせよ，十字軍武勲詩に白鳥の騎士のモチーフが組み込まれたことによって，中世ヨーロッパの文学におけるその地位は確固たるものとなる。そしてこのフランスの白鳥の騎士のモチーフはさらにドイツに伝播するが，特にドイツではグラール（聖杯）と結びつけられることにより独自の形式を確立していく。

3. Gral から来た白鳥の騎士—中世ドイツ叙事詩における白鳥の騎士

フランスでは白鳥の騎士主題が武勲詩に取り入れられたが，その後ドイツでは Wolfram von Eschenbach によって叙事詩 *Parzivâl* の結末部分（823, 27–826, 30）に移入された。現在ではこの Wolfram の作り上げた白鳥の騎士像が一般的なものであり，「Loherangrin（ロヘラングリーン）」と名付けられた白鳥の騎士は，Wagner が 19 世紀にロマン的歌劇 *Lohengrin* を創作したことによって決定的なイメージを確立し，現在ではその原典であるフランスの白鳥の騎士よりも優勢である。

ここで Wolfram による *Parzivâl* に描かれた「白鳥の騎士 Loherangrin の物語」のプロットの再確認をしておこう。簡略化すれば，物語は次の順

14）Neue deutsche Biographie, hg. v. der historischen Kommission bei der Bayerischen Akademie der Wissenschaften, 6. Band, Berlin 1964, S. 662. なお，Gozelo I. の夫人が明らかになっておらず，その系譜上の欠陥を補うために超自然的な白鳥の騎士の母が描かれた可能性もある。

15）Le Baron de Reiffenberg, Le Chevalier au cygne et Godefroid de Bouillon, Bruxelles 1846, S. XCIII–XCIV.

で描写される。

a. ブラバントでは高貴な女性が危機に直面している。彼女は富と高貴な血筋とに恵まれており，多くの貴人たちに求婚されていたが，神の定めた方以外とは結婚しないと言うのだった。
b. その女性のもとへ白鳥の曳く小舟に乗った騎士が現れる。彼はこの国の領主となるが，その際に決して彼の名前と素性を尋ねない事を彼女に約束させる。
c. 騎士は高貴な女性と結婚する。
d. 騎士は立派な君主として領地を治め名声を得るが，妻は子どもの父親でもある夫の素性に疑念を抱く。
e. 妻は夫に禁じられた問いかけをする。騎士は到着時と同様に白鳥の曳く小舟に乗り，去ってゆく。彼はグラール城主 Parzival の息子 Loherangrin であった。

このようにして作品のモチーフを整理することにより，フランスの白鳥の騎士との相違点が明らかになるであろう。問いかけの禁止などのモチーフは共通しているものの，根本的に異なっているのは白鳥の騎士の名前と出自である。Wolfram 以降のドイツの作品では白鳥の騎士はグラール（聖杯）城由来の出自を持つものとされており，Loherangrin という名前を付与されている。名前に関しては白鳥の騎士伝説の舞台が多くはライン川下流域のロートリンゲン地方であることから，地理上の近さゆえに Wolfram が 11，12 世紀のブラバント地方の状況を描いた *Lothringer Epen* の主人公 Il Loheren Gerin=Garin der Lothringer（ロートリンゲン人 Garin）から借用したとされているが[16]，Wolfram が「白鳥の騎士伝説」

16）Wolfgang Golther: Parzival und der Gral in der Dichtung des Mittelalters und der Neuzeit, Stuttgart 1925, S. 191. なお，ロートリンゲン叙事詩とフランスの白鳥の騎士伝説では，それらの舞台である土地が地理的に近いこ

と「グラール伝説」を結合させた理由は現在に至るまで解明されていない。グラール城主 Anfortas の苦悩の原因への「問いかけを怠った」父 Parzival と，「問いかけられた」ことによって妻のもとを去らなければならなかった息子 Loherangrin の間に「問いかけ」のモチーフが共通しており[17]，それが Wolfram による白鳥の騎士伝説の採用の契機になったとも考えられている。

ドイツの Wolfram の後継者たちは，この *Parzivâl* における性格を踏襲したため，以降の作品においても白鳥の騎士は Loherangrin，Lohengrin などの名前と Parzival の息子という出自を付与されて描かれている。主な作品は Nouhuwius(?) の *Lohengrin*（1285 年頃）[18]，長らく Wolfram の作とされていた Albrecht による *Jüngerer Titurel*（1260–70 年頃）[19] そして Albrecht を踏襲して 15 世紀に創作された Ulrich Fuetrer の *Buch der Abenteuer*（1473–87 年頃）[20] および「問いかけの禁止」モチーフが存在しない作者不詳 *Lorengel*（15 世紀末）[21] などである。

ここでフランスの十字軍武勲詩における白鳥の騎士と比較するために，

とに加え，前者の登場人物 Garin と後者の主人公である白鳥の騎士 Elias の母の名前が Beatrix（特に *Beatrix* バージョン）で共通している。これらの共通点から着想を得た Wolfram が，Garin le Loherain と言う名前をもとにして白鳥の騎士に「Loherangrin」と名付けた可能性もある。Vgl. Thomas Cramer: Lohengrin, Edition und Untersuchungen, München 1971, S. 128.

17）Joachim Bumke, Wolfram von Eschenbach, Stuttgart 2004, S. 112.

18）Lohengrin, Edition und Untersuchungen, hg. v. Thomas Cramer, München 1971.

19）Albrecht von Scharfenberg: Albrechts Jüngerer Titurel, Bd. III–2, hg. v. Kurt Nyholm, Berlin 1992.

20）Ulrich Füetrer: Das Buch der Abenteuer, hg. v. Heinz Thoelen, Göppingen 1997.

21）Lorengel, hg. v. Elias Steinmeyer, in: ZfdA 15 (1872), S. 181–244. および Lorengel, hg. v. Danielle Buschinger u. Horst Brunner, Göppingen 1979.

Wolfram の *Parzivâl* における Loherangrin の出自について概略を示す。Loherangrin の父はグラール城主 Parzival であり，母はその妻である Condwiramurs である。Parzival の父はアンショウヴェの王の息子 Gahmuret, 母がグラール城主 Anfortas の妹 Herzeloyde であり，Condwiramurs はペルラペイレの王女であるため，ドイツの白鳥の騎士 Loherangrin はフランスの白鳥の騎士 Elias（特に *La Naissance du Chevalier au Cygne* の *Elioxe* バージョンにおける）のような超自然的な出自を持ってはいない。もちろん兄弟の白鳥への変身譚も含まれていないことからも，Wolfram の描いた白鳥の騎士物語が，フランスのそれが舞台を置いていたメルヒェン的世界から脱却したことが理解できる。

しかし，このようにして完全な騎士社会に舞台を移したと思われるドイツの白鳥の騎士であるが，グラールと結びつけられたことにより，「ある種の超自然的性格」を備えることとなったことも明らかである。次ではフランスとドイツの白鳥の騎士の各々が持つ超自然的，あるいは異界的性格について考察する。

4. 「白鳥乙女伝説」と「Gral の国という異界から来た花婿」という超自然性あるいは異界性

これまでフランスの十字軍武勲詩と Wolfram による *Parzivâl* において，白鳥の騎士がいかなる描写をされているかを述べてきたが，十字軍武勲詩では第一回十字軍の英雄 Godefroy de Bouillon の祖父でありながらも，*Elioxe* バージョンではその出自は超自然的なものであり，いまだメルヒェン的な世界観を保持したものであった。

他方 *Parzivâl* ではグラール城主 Parzival という Artus 王物語の登場人物の中でも最も重要な 1 人との系譜上の関係づけがなされることにより，白鳥の騎士は中世ヨーロッパの宮廷社会における理想的騎士として描写されていた。しかし，前述のようにグラール城出身という Loherangrin の出自もまた，ある意味で超自然的であると考えられるのである。ここではフ

ランスとドイツの白鳥の騎士が，種類こそ違えど同じように「超自然性」あるいは「異界性」を備えていることに着目し，根底にある共通点を論ずる。

4.1.　フランスの白鳥の騎士物語における超自然性あるいは異界性

はじめに，フランスの白鳥の騎士物語に含まれる超自然的，あるいは異界的モチーフについて考察する。フランスの白鳥の騎士物語は 2 つの伝説から，すなわちケルト伝説などに頻繁に見受けられる「白鳥への変身譚」と「正体不明の騎士が救援に現れる伝説」から合成されたものと考えられ，キリスト教的世界ではなくケルト的な超自然的，異界的イメージを多く含んでいる。

「白鳥への変身譚」とは子どもたちが他者による何らかの行為（魔法をかけられる，あるいは子どもたちの首に巻かれた鎖を奪取される）によって白鳥に変身してしまうというプロットを持つ物語であり，代表的なものとしては 19 世紀の Grimm 兄弟による *Kinder- und Hausmärchen*（『子どもと家庭のためのメルヒェン』：初版 1812 年）に蒐集されたメルヒェン *Die Sechs Schwäne*（「六羽の白鳥」：KHM49）が挙げられる[22)]。つまり，それは口承の形態で近代にいたるまで受け継がれていたのだが，古いものでは前述した 12 世紀の十字軍武勲詩 *La Naissance du Chevalier au Cygne*（『白鳥の騎士の誕生』）における *Elioxe* と *Beatrix* の両バージョンとほぼ同時代の作品である *Dolopathos*（『ドロパトス』：1185 年頃）に白鳥の騎士の誕生を語る箇所が含まれている[23)]。それは作者 Johannes de Alta Silva 自身が語るところによれば口承説話から採集したものであり[24)]，十字軍武勲詩の *La Naissance du Chevalier au Cygne* の *Elioxe* と *Beatrix*

22）グリム兄弟：『グリム童話集』2，金田鬼一訳，岩波文庫　1979.

23）ヨハンネス・デ・アルタ・シルヴァ：『ドロパトスあるいは王と七賢人の物語』，西村正身訳，未知谷　2000.

24）ヨハンネス・デ・アルタ・シルヴァ（2000），S. 205.

の両バージョンを混合したような筋を持つが，特徴としてはより民話的な世界観を持つことが挙げられる。例えば，白鳥の騎士の両親が「ある高貴な若者」と「ニンフ」であるなど，登場人物や土地などが特定されていないといったことがメルヒェンの原則に符合している。

十字軍武勲詩の *La Naissance du Chevalier au Cygne* の *Elioxe* と *Beatrix* の両バージョンと，この *Dolopathos* の白鳥の騎士に関する記述の典拠関係は明らかになっていないが，*Dolopathos* が武勲詩の両バージョンの原典であるか，あるいは共通の原典を持つと考えられている[25)]。そのため，フランスにおける白鳥の騎士物語は，元来民話形式の素朴なものであったと考えることができ，武勲詩に組み込まれるに至って登場人物にアイデンティティーが与えられ，キリスト教や宮廷的な要素が付与されたと推測される。

しかし，*Dolopathos* や武勲詩の *La Naissance du Chevalier au Cygne*（特に *Elioxe* バージョン）では，「白鳥への子ども達の変身」[26)] や「予言のモチーフ」[27)] あるいは異界と人間界との境界である「泉」や「水」[28)] など

25）The Old French Crusade Cycle, vol. 1, La Naissance du Chevalier au Cygne, The University of Alabama 1977, S. lxxxxiv–lxxxxv.

26）ケルトの伝説には子どもが白鳥に変身する『リールの子』や，人間と首に金の鎖を巻いた白鳥に一年ごとに変身するカーという女性の物語がある。また，神族のミディールがエーディンという女性に求婚するが，彼の身に降りかかる難題を解決する過程で金の鎖をつけた白鳥に変身する。Vgl. 井村君江：『ケルトの神話』，ちくま文庫　1990，S. 111–136. フランク・ディレイニー：『ケルトの神話・伝説』，鶴岡真弓訳，創元社　2000，S. 118–132.

27）1204 年頃に成立した *Nibelungenlied* では，Kriemhild の招きによってフン族の国へ向かうブルグント王一行がドーナウ川で足止めを食った際，Hagen が三人の乙女を見つけ一人の衣を奪い，その際に乙女が予言する場面が描かれている。また，ゲルマン神話の世界樹の根元にあるウルズの泉には三人のノルンがおり，予言の力を持つ。このようにしてゲルマン神話やその系統に属する英雄叙事詩には予言の力を持つ女性が登場する。Vgl. Paul Herrmann: Deutsche Mythologie, Berlin 1991, S. 318.『ニーベルンゲンの歌』後編，相良守峯訳，岩波文庫　1997，第 25 歌章.

28）ハワード・ロリン・パッチ：『異界――中世ヨーロッパの夢と幻想』，黒

が共通して描かれており，そこからは物語がケルトやゲルマンなどのキリスト教的な影響が確固となる以前のヨーロッパ文化の伝承を保持していることを理解できる。特に生まれつき首に巻かれていた鎖を奪われることにより子どもたちが白鳥に変身するくだりからは，その母がゲルマンの伝説に登場する「白鳥乙女」であることも推測される。

十字軍武勲詩というキリスト教的な世界観の中に描かれた白鳥の騎士であるが，上記のように白鳥の騎士の出自は非キリスト教性や異界性を窺わせるものであり，元来はキリスト教以前のゲルマン的なあるいはケルト的な世界観を持つ伝説とも定義しうるのである。

さらに異界性を印象付けるのが白鳥の騎士が成長した後，白鳥の姿のままの兄弟の曳く小舟に乗って冒険に出発する場面である。十字軍武勲詩では騎士は白鳥の連れてゆくままにナイメーヘンまでたどり着くが，このように舟による目的地のわからない旅もまた古くからヨーロッパ文学に描かれていた。古代英語の英雄叙事詩『ベーオウルフ』では Sceaf という伝説的人物が「幼い日に舟に乗り，漂着したその地を後に支配」することが書かれている。また，彼は死後に舟に乗せられて海に流されるのであり[29]，スカンディナヴィアではこのような舟による葬送が風習であった[30]。そのためこの舟のモチーフもまた彼岸と此岸を結ぶ手段としてあげられ，異界性を示すものであると理解できる。

このようにしてフランスの十字軍武勲詩における白鳥の騎士は，その出自をはじめとして多くの異界性や超自然性を含んでいるものと推測することが可能である。

瀬他訳，三省堂　1983，S. 29–84. および，伊藤進：『森と悪魔――中世・ルネサンスの闇の系譜学』，岩波書店　2002，S. 278–290. を参照。

29）鈴木重威編：『古代英詩ベオウルフ』，研究者出版株式会社　1969.

30）ウラジーミル・プロップ：『魔法昔話の起源』，斉藤君子訳，せりか書房　1983，S. 212–213.

4.2.　ドイツの白鳥の騎士物語における超自然性あるいは異界性

一方ドイツの白鳥の騎士はどのような部分が超自然的，あるいは異界的であるのだろうか。フランスの十字軍武勲詩とは異なり，ドイツの白鳥の騎士は Wolfram von Eschenbach 作の *Parzivâl* における描写によって「Parzival の息子でありグラール城出身の Loherangrin（Lohengrin）」というイメージが確立された。また，母 Condwiramurs もペルラペイレの王女という現世の宮廷にその出自を持つ女性である。このようにしてドイツの白鳥の騎士 Loherangrin は，キリスト教的な社会から誕生し，その出自と成長は中世の騎士にとって理想的なものであるが，一方でグラール城がキリスト教的なイメージの他に異界性あるいは超自然性を内包していることも事実である。

Wolfram のグラールは「聖石」とも呼ばれるが[31]，それを守護しているグラール城，つまり Munsalvæsche の所在と本質は超自然的であるとともに異界性を備えている。物語の第 16 の書，つまり結末部分に登場する Parzival の息子 Loherangrin はブラバント公女を救援するためにグラール城を出発する。以下は彼の道行を描いた部分である。

31）Wolfram による *Parzivâl* において Graal について形状は「混じりけのない石」であり，その名は「ラプジト・エクシルリース」（»*er heizet lapsit exillîs*.«: *Parzivâl*, 469, 7）といいその本質は謎に包まれている。元来 Graal とは古フランス語であり，語源学的観点からするとラテン語の cratalis と関係していると思われ，「Mischgefäss」の意味である。Chrétien はこの器の意味で Graal を使用している。現在我々がグラールという語から思い起こす「キリストが最後の晩餐で使用した，あるいは磔刑にあるキリストの血を受けた器」というイメージは，Chrétien と同時代に活躍したと考えられる Robert de Boron の *Roman du Saint-Graal*（『聖杯の物語』：1200 年頃）に描かれたものである。後代に Wolfram による「聖石」と Robert の記述が結びついた結果，誕生したのが「聖杯」としてのグラールのイメージである。Vgl. Horst Brunner: Geschichte der deutschen Literatur des Mittelalters im Überblick, UB Nr. 9485, 1997, S. 215.

si was fürstîn in Brâbant. / von Munsalvæsche wart gesant / der den der swane brâhte / unt des ir got gedâhte. / ZAntwerp wart er ûz gezogn. (824, 27–825, 1)

（彼女はブラバントの領主だった。やがてムンサルヴェーシェから白鳥に運ばれて，神が定めたもうた勇士が遣わされて来た。彼はアントヴェルプの岸辺に上陸した。）

der fuor wazzer unde wege, / unz wider in des grâles pflege. (826, 23–24)

（彼はそれから水路陸路を通って，聖杯護持の仕事に戻っていった。）

do er für si gienc vome sê. (826, 28)[32]

（彼は以前海を渡って彼女のもとに来た時…[33]）

以上の記述から，Loherangrin は水上を移動してブラバントの姫君のもとへ到着したことが理解できる。この点ではフランスの十字軍武勲詩と共通しており，「舟行」という異界と人間の住む通常の世界との往来を描いている。「水」は彼岸と此岸との境界を形成するものであるが，例えば Hartmann von Aue の *Iwein*（『イーヴェイン』：1190–1200 年頃）において主人公 Iwein は，「泉」を境界として Artus 王の世界から Laudine の住まう世界に入り，泉の番人である Askalon を倒した後に彼女を妻として得る[34]。この様に中世ヨーロッパ文学では多くの場合「異界」と思われる場所と人間達の住む場所との境界に「水」が存在しており，*Parzivâl* における白鳥の騎士 Loherangrin の物語もその系譜に属している。つまり，

32）原文は以下の文献による。Wolfram von Eschenbach: Parzival. Studienausgabe 2. Auflage, Mittelhochdeutscher Text nach der sechsten Ausgabe von Karl Lachmann. Berlin, New York 2003.

33）Wolfram による *Parzivâl* の日本語訳は以下の訳本による。ヴォルフラム・フォン・エッシェンバハ：『パルチヴァール』，加倉井他訳，郁文堂 1974.

34）Vgl. ハルトマン作品集，『イーヴェイン』リンケ珠子訳，郁文堂　1982.

彼が救援に向かうブラバントから見たMunsalvæsche（グラール城）は異界であり，そのことは「水」という媒体によって境界付けられることによって「空間的に符号化」[35] されている。この意味でLoherangrinは，キリスト教的な性格を帯びた異界の出身であるということは明白であるが，Munsalvæscheの異界性はそこで守護されているグラールの機能からしても確認できる。問題となる箇所はParzivalがTrevrizentの説明によってグラールの本質を知ることとなる場面であり，以下のように説明される。

> ouch wart nie menschen sô wê, / swelhes tages ez den stein gesiht, / die wochen mac ez sterben niht, / diu aller schierst dar nâch gestêt. / sîn varwe im nimmer ouch zergêt: / man muoz im sölher varwe jehn, / dâ mit ez hât den stein gesehn, / ez sî maget ode man, / als dô sîn bestiu zît huop an, / sæh ez den stein zwei hundert jâr, / im enwurde denne grâ sîn hâr. / selhe kraft dem menschen gît der stein, / daz im fleisch unde bein / jugent enpfæht al sunder twâl. / der stein ist ouch genant der grâl. (469, 14–28)
> （人間もその石を見れば，どんなに病み衰えていようとも，その後一週間は死なずに生きながらえることができるのだ。その皮膚は決して生気を失うことはない。乙女であろうと，男であろうと，皮膚はその石を見たときと変わらず，その人の若い盛りの始まる頃の色艶そのままと言わざるをえない。もしその石を二百年の間見ていれば，ただ髪の色が灰色になるだけで，この石は，人の肉や骨がその若さを保つ力を与える。ところでこの石はまたグラールとも言われている。）

さらにはグラールのもとで暮らす人々はグラールから食物を与えられ，フェニックスもその力で永遠の生命を得ているとも記述されているが，こ

35）Uta Störmer-Caysa: Grundstrukturen mittelalterlicher Erzählungen- Raum und Zeit im höfischen Roman. Berlin 2007, S. 205.

の Munsalvæsche（グラール城）のような「常若の国」の概念は古くからヨーロッパの伝説や文学作品に描かれており，後述する Marie de France による *Lanval*（12 世紀後半）において異界の出身である妖精によって主人公 Lanval が導かれる国もその一例である[36)]。人は神の摂理に従えば年老いるものであるが，それに逆行する Munsalvæsche や *Lanval* の妖精の国は，キリスト教的な世界観が表面的には重んじられていた中世騎士社会にとっては異界，あるいは他在の象徴である。この様にして Munsalvæsche とそこに出自を持つ白鳥の騎士も，異界的な存在であると推測することができる。

5.　Mahrtenehe としての白鳥の騎士物語

中世フランスとドイツの白鳥の騎士物語を概観することにより，フランスの十字軍武勲詩の特に *Elioxe* バージョンにおける白鳥の騎士の出自は超自然的なものであり，さらに物語には子どもたちの白鳥への変身や何らかのタブーが課せられるなどといった神話的・伝説的要素がちりばめられていることが明白となった。フランスの物語において特にその傾向が強いわけだが，白鳥の騎士はいくつかの特徴をそのまま引き継ぐ形で Wolfram によってドイツへと移入された後，「白鳥の騎士 Loherangrin の物語」としてさらにはグラールという新しい異界的，また超自然的なモチーフと結びつけられた。

特に出自に関する各モチーフの演繹的な考察によって，白鳥の騎士が異界性を備えた存在であることが理解されたかと思われるが，このような異界的存在と人間との結婚を描く物語のシェーマが中世ヨーロッパ文学には存在していた。異類婚を描く多くの物語がそのシェーマを保持していたことから，本論の結論として白鳥の騎士物語の構造分析を通じて，異類婚物語のシェーマと白鳥の騎士物語の構造との共通点を導き出すことによって，白鳥の騎士が異界的人物であるという帰納的な論証を試みる。

36）フランス中世文学集 2　―愛と剣と―，『ランヴァル』新倉俊一訳，白水社　1991，S. 351–368.

中世ヨーロッパにおける異類婚物語を分析し，そこに共通するシェーマを導き出したのは Friedrich Panzer（1870–1956 年）であるが，彼はそのシェーマを“die gestörte Mahrtenehe”（「阻害された異類婚」と意訳できる）と呼んだ[37]。彼は同形態のプロットを持つメルヒェンを列挙した後に，以下のようにその特徴をまとめている。

1. 一人の若者が妖精の国で妖精的な妻を得る。
2. 人間の世界に戻るために彼は妻のもとを離れる。
3. 妻は彼に，人間の世界で彼女について話さないように，それを守らなければ彼女を永遠に失うと言う。
4. 主人公はこの言いつけを破り，妻を失ってしまう。
5. 辛抱強く妻を探す彼を，超自然的な存在が再び妖精の国へと連れていき，妻と末長く結婚生活を送ることとなる。

このような形態はメルヒェンに多く見られるとともに，中世期のドイツやフランスの文学の一形式でもあった[38]。また，アモールとプシケーの神話もその例の一つ[39] であり，神と人間との婚姻を描く神話にも同様の構造が含まれていた。このシェーマをより簡略化すれば，「1. 異類と人間の結婚，2. 一旦離れる，3. 何らかの禁忌の存在，4. 禁忌が破られること

37）Ulrich Fuetrer: Merlin und Seifrid de Ardemont von Albrecht von Scharfenberg in der Bearbeitung Ulrich Füetrers, hg. v. Friedrich Panzer, Tübingen 1902, S. LXXII–LXXXIX.

38）„die gestörte Mahrtenehe“ については他に以下の文献を参考にした。Armin Schulz: Spaltungsphantasmen. Erzählen von der ‚gestörten Mahrtenehe‘, in: Wolfram-Studien XVIII (2004), S. 233–262.

39）„Mahrtenehe“ とは明記していないものの，その代表でもある *Melusine* 伝説に関する論において，W. Haug はアモールとプシケーの物語を *Melusine* と同系列のものとしている。Vgl. Walter Haug: Brechungen auf dem Weg zur Individualität. Kleine Schriften zur Literatur des Mittelalters, Tübingen 1995, S. 355–356.

による離別，5. 再会」となるが，その特徴に完全に一致していなくとも，一部符合していれば“die gestörte Mahrtenehe”であると考えることも可能であり，白鳥の騎士が公女を救援する際に彼の出自に関する問いかけの禁止を課し，それが破られることによって離別する物語は明らかに“die gestörte Mahrtenehe”に分類可能なものである。

Panzer は他に「白鳥の騎士伝説」と関係の深い「白鳥乙女伝説」を Mahrtenehe に近い類型として挙げているが[40]，*Dolopathos* やフランスの武勲詩における白鳥の騎士 Elias は，元来は白鳥乙女やニンフの様な超自然的な存在から誕生した人物であると理解できる。子ども達の白鳥への変身は，本来その母が白鳥乙女，つまり半ば白鳥，半ば人間と言う Mischwesen としてのデモーニッシュな存在[41] であることを示唆しているからであり，そのようなデモーニッシュな存在と人間との結婚は明らかに Mahrtenehe のカテゴリーに入るものである。そのような異界的な出自を持つ白鳥の騎士が，完全に「人間」である公女と結婚するためには何らかの禁忌が必要となるのであり，物語は“die gestörte Mahrtenehe”のシェーマを持つこととなる。

元来，異類婚を描く物語では，超自然的なパートナーが女性であることが多く[42]，とりわけよく知られているのがフランスで誕生し，その後ドイツでも改作された *Melusine*[43] や Marie de France による *Lanval* などである。これらでは女主人公が明らかに異界の存在であるが，それと同様にフランスの武勲詩の白鳥の騎士物語において，*Elioxe* バージョンではその母親がそもそも超自然的な存在であった。しかし，*Beatrix* バージョン

40）Friedrich Panzer: Studien zur germanischen Sagengeschichte, Vol. 2., Sigfrid, Wiesbaden 1969, S. 63 f..

41）Handwörterbuch des deutschen Aberglaubens, Bd. 2., hg. v. Hanns Bächtold-Stäubli, Berlin/New York 2000 (Reprint), Sp. 157.

42）Haug (1995), S. 355.

43）ジャン・マルカル：メリュジーヌ，中村・末永訳，大修館書店　1997. およびクードレット：メリュジーヌ物語，松村剛訳，青土社　1996. を参照。

では母親が王妃という宮廷的社会に属する人物になっているが，これはGodefroy de Bouillonというキリスト教の英雄の系譜に白鳥の騎士を組み込むためには物語における非キリスト教的な超自然的要素を，世間で有効な是認された秩序に近づけるために中世騎士社会に適合したものへと改編[44]した一例の発展型であると考えられる。

一方ドイツの白鳥の騎士物語においては主人公が男性になり，より宮廷騎士社会にかなった人物の物語を描くことで異類婚物語のもう一つの異なった発展型を示している。ドイツのWolframによる*Parzivâl*では，グラール城Munsalvæscheを「異界」として規定することにより，そこに由来する出自を持つLoherangrinとブラバント公女との結婚もMahrtenehe と理解することが可能であろう。物語はフランスよりも異界性の影を潜めてはいるが，グラール守護という使命を担ったLoherangrinと完全な俗世界のブラバント公女との結婚は異類婚であり，何らかのタブーが必要となる。この様にしてドイツの白鳥の騎士物語も“die gestörte Mahrtenehe”のカテゴリーへの分類が可能であると考えられるのである。

こうして形式からしてもフランス，ドイツの白鳥の騎士物語が“die gestörte Mahrtenehe”であり，白鳥の騎士が元来は異界性を秘めていることが明白となるのである。

6. 結び

フランス，ドイツの白鳥の騎士が，キリスト教が確固たる地位を得る以前のヨーロッパにおいて支配的であったケルトやゲルマン的な超自然性，あるいは異界性を付帯された存在であることはこれまでの論から少なからず明白となったであろう。しかし，白鳥の騎士物語はフランスの十字軍武勲詩においては十字軍の英雄Godefroy de Bouillonの祖父とされることにより，ドイツにおいてはグラール（聖杯）伝説と結びつけられることに

44）Jan-Dirk Müller: Höfische Kompromisse. Acht Kapitel zur höfischen Epik, Tübingen 2007, S. 93.

より，次第にキリスト教的な世界観を強めていったのである。これは表面的にはキリスト教の影響力が強化された中世以降のヨーロッパにおける文学の宿命でもあったに違いない。

そして時代が下り 19 世紀に Richard Wagner のロマン的歌劇 *Lohengrin* が誕生した。注目すべきことにこの作品においてゲルマン的な要素が復活したのである[45)]。しかし，それは白鳥の騎士 Lohengrin 自体にではなく，Ortrud という脇役の女性の中に復活の場を得たのであった。本論の冒頭で，彼女がゲルマンの神々の復活を祈念していることは述べたが，実は彼女は Lohengrin の影の部分を映す鏡のような役割を持つとも理解できるのである。影の部分とはこれまで論じてきた，白鳥の騎士が本来備えていたゲルマンやケルト由来の非キリスト教的な超自然性，あるいは異界性である。これに対して表の部分は伝説の発展段階で取得された後天的なキリスト教的な騎士という性格なのであり，これらは主人公 Lohengrin に備わる「アンビヴァレントな性格」と考えられる。

しかし，この様な主人公を文学作品に受容した中世やそれ以降のヨーロッパの人々もまた，キリスト教が支配的となる社会にあって過去のゲルマンやケルト的な思想観を保持していた「アンビヴァレントな存在」であったとも考えられる。こうして表面上はキリスト教的なヨーロッパ社会の深層には，なお遠い時代のケルトやゲルマンの神話の面影が残されていることを確認できるのではなかろうか。

45）Ortrud の他にも Wagner はゲルマン的な世界を *Lohengrin* の中で描いていた。それは Lohengrin が救援する Elsa の弟 Gottfried が，実は Lohengrin を乗せた小舟を曳くあの白鳥であるという物語である。Gottfried は Ortrud によって変身させられたのであり，この変身物語は明らかに『ドロパトス』やフランスの十字軍武勲詩に描かれた子どもたちの白鳥への変身譚に関係するものである。